長野県短期大学紀要　第55号　93-105頁　2000年12月

『好色一代女』に描かれた「老い」

平林香織*

一　はじめに

井原西鶴の浮世草子第一作である『好色一代男』（天和二年）は浮世之介七歳から六十歳にいたる好色生活を描く。その好評を受け、二年後の貞享元年、世之介が捨てた一子、世伝の遊里生活を描いた『諸艶大鑑』が刊行される。さらに二年後、その半生に三十三に及ぶ職業を遍歴した一代女の好色生活を扱う『好色一代女』刊行。いずれも一人の人物の好色生活を軸にすえた長編的機構の作品であるが、世之介誕生の記述から始まる『好色一代男』、世伝三十歳の夢告に始まる『諸艶大鑑』に対して、年老いた一代女がまず登場する『好色一代女』という違いがある。『好色一代女』は、女性が中心的な人物であること、そして、「老い」の世界から作品が始まっている点に特徴がある。それが、『七人比丘尼』『二人比丘尼』など女性の懺悔物を模していることに起因するスタイルであることはいうまでもない。加えて篠原進氏[1]や鈴木智恵子氏[2]が明らかにしてきたように小町伝説による美女落魄のイメージが一代女に重ねられてもいる。懺悔物にしても小町物にしても年老いた女性の回想というモチーフが不可欠である。『好色一代女』の冒頭に老女が登場するのは当然の帰結とも考えられる。しかし、それにしても、作品には老人に関する記述が多いのではないか、というのが本稿の出発点である。

『好色一代女』は風俗小説か、女性の一代記かという長い議論の中で、老女一代女をどうとらえるかということに関する直接的な言及は少ない。小町伝説に代表されるように、美女にとって老いは望ましくないものであるというのがあまりにも自明のことだからだろうか。

『好色一代女』を喜劇的な好色風俗小説と断ずる谷脇理史氏も、老いた一代女の姿を悲劇的なものとして捉えている。[3]

確かに「老い」は、いかんともしがたい。老いた往年の美女の一代女は、「あの女は賃でもいや」といわれ、もはや「命を断つ斧」としての資格を喪失してしまうのである。確かにこれは「悲劇」であるにちがいない。とりわけ、巻四以前の一代女のイメージと対比した時、悲惨でさえあるようにも見える。しかし、「老い」の「悲劇」は、封建社会にのみ限られるはずのものではなく、女に限られるものでもない。（傍線部引用者、以下同じ。）

谷脇氏は、作中の自己省察的な記述のみを取り出して『好色一代女』を悲劇的な女性の一代記と断ずることの危険性を指摘して

*〒380-8525　長野市三輪八-四九-七　長野県短期大学

いて、その点は首肯すべきであろう。それはそれとして、ここで考えたいのは、一代女の「老い」が果たして「悲劇」なのかという問題である。

一方、宗政五十緒氏[4]や岸得蔵氏[5]による悲劇的な一代記として『好色一代女』を理解する論でも、下降線をたどる彼女の人生の時間において、老いは容色や肉体の衰微をもたらすものとして否定的に捉えられている。また、「老い」が「個々の一代女の落魄の話を成立させるためのひとつの要因でしかない」と捉える森耕一氏の論[6]においても、「老い」はあくまでも否定的な契機として定位されているように見受けられる。

一方で、「一代女はしたたかに不滅なのである」というような彼女のしたたかさへの言及[7]がしばしば行われている。倉員正江氏も、「老い」そのものに対しては否定的に理解しつつ、「自らの好色性に対する否定は、さして感じられない」と指摘する[8]。この一代女のしたたかさを老いと結びつけて考えられないだろうか。

確かに容色の衰えという側面からだけ考えるならば「老い」は悲劇だろう。しかし作中の「老い」は、醜さという側面からのみ描かれているのだろうか。

ここで、『好色一代女』に影響を与えた小町伝説のうち、謡曲小町物について考えてみよう。

謡曲の場合、七小町などと称して同列に扱われがちな小町物であるが、たとえば、観阿弥による『卒塔婆小町』は四番目物に分類され、世阿弥によるかとされる『関寺小町』は三番目物に分類される。この二曲は、いずれも能の難曲秘曲とされる老女物で美女落魄伝説に取材しており、老女小野小町をシテとするが、老女の描き方においてまったく趣の異なるものである。

『卒塔婆小町』は卒塔婆問答で始まる。「今は民間賤の目にさへ穢まれ、諸人に恥をさらし、嬉しからぬ月日身に積もつて、百年の姥と成て候[9]」と都に居られず漂泊する老婆が、「余りに苦しう候程に、これなる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候」と、卒塔婆に腰掛けて休んでいる。それを見とがめたワキ僧が「教化して退けうずるにて候」と問答をしかける。しかし、ワキとワキヅレの二人掛かりの問い掛けに対して、老婆は「我も賤き埋木なれ共、心の花のまだあれば」と一向に怖じない。堂々と論陣を張り僧を論破する。「まことに悟れる非人なりとて、僧は頭を地に付けて、三度礼し」老女の昔を問う。ここでの小町は確かに肉体的社会的には老い衰えて力無い存在であるが、その精神的力は強くたくましい。そして小町物に付きもののかつての美しさを回想する場面で、老女は「是は出羽の郡司小野の良実が娘、小野小町がなれる果てにさぶらふなり」と多くを語らない。一曲はかつての小町の美しさの描写以上に、現在の小町の出で立ちの描写に力点を置く。乱れた髪や衰えた肌といった容色のみならず、食糧の入った袋と竹篭を首と肘に掛け、粗末な着替えの入った袋を背負い、破れ簑と破れ笠を身に纏った姿の異常さを際立たせている。これはいうまでもなく続く四位少将の霊の憑依による物狂いの場面につながっていくものである。ワキ僧とシテの教義問答、小町の今と昔、四位少将と小町という二項対立を重ねることによる劇的な葛藤の高まりが、「沙を塔と重ねて、黄金の膚こまやかに、花を仏に手向つつ、悟りの道に入らふよ、悟りの道に入らふよ」というキリに収斂する。すでに精神力においてワキ僧にまさっていた老女が、悟道に入り、「黄金の膚」という永遠の輝きを獲得したかの如くである。

このような力強く彷徨する動的な老女に対して、『関寺小町』では、沈潜する静的な老女小町が登場する。七夕の夜、百夜通い

の報いを受けて篭居する「哥道を極めた」[10]老女を関寺の僧侶が稚児を伴って訪れる。彼女は、老残を恥じ、昔を恋しのび、「いとどしく老の身の、弱り行果ぞ悲しき」と沈みがちな風情を呈する。所作の上でもシテはほとんど動かず、最後の老舞が見所になっている。「幾久しさぞ、万歳楽」という祝言に伴う稚児の舞を、「荒面白の唯今の舞の袖やな」と老女は歓び、「狂人走れば不狂人も走るとかや、今の童舞の袖に引かれて、狂人こそ走り候へ」と舞い始める。「さす袖も手忘れ裳裾も足弱」い老女の舞を「老木の花の枝」と表現する詞章からは、篭もりきりで体も心も閉ざしていた老女が動き出したことへの感動が伝わる。おぼつかない足取りではあるが、かつての花を含みこんだ老いの舞は、老女の心に静かなしかし確かな感情の高まりと解放があったことを伝えて余りある。老舞は、老いのもつ衰えや弱々しさといった肉体の衰えを如実に伝えつつ、過去の美貌と名声、来し方の喜びと悲しみ、生と死の構図、孤独、絶望、あきらめ、そして祈り等々グラデーションのかかったあらゆる想いを表現する。先行する『卒塔婆小町』とはまた別の老いの表現である。

平安時代中期以降『玉造小町盛衰書』と連動して「美女驕慢説話と衰老落魄説話」[11]が形成されてきたにしても、謡曲において既に小町伝説は換骨奪胎されていた。確かに、『平家物語』において「はてには人の思ひのつもりとて、風をふせくたよりもなく、雨をもらさぬわざもなし」[12]（「小宰相身投」）と記されるような小町像は、「美しすぎるほど美しく驕慢にして男を寄せつけなかった小町が、年老い、男に捨てられて、孤愁に泣き、落魄したというストーリー」[13]に即したものではある。しかし、そのような盛者必衰のイメージとは次元の異なる「老い」と向き合う二通りの小町の姿が『卒塔婆小町』『関寺小町』には形象化されている。

一方で『翁』を重視し、祝言能の中で養老を多くテーマにしつつ、老女物狂いや鬼女伝説を扱う謡曲の世界において「老い」の表現は早くから重要な問題として追求されていたように思う。

そして改めて我が国の文学の伝統を振り返ってみるならば、たとえば、『大和物語』にある信州更級の姨捨山伝説は、棄老伝説として名高いが、妻の言いなりになって養母である「をば」を棄てた男が、自責の念に駆られて「をば」を連れ帰る話である。小峯和明氏によれば、我が国の棄老譚は、「いったんは老人を捨てるが、結局は連れ戻す型で一貫しており、棄老譚としてくくるのはじつは適当ではない。むしろ棄老を媒介とする養老譚であった」といわなければならない[14]という。姨捨伝説に見られる棄老から養老へという方向性ひとつとってみても、文学に形象化された「老い」を一面的に捉えることができないことは明らかである。

以上のような立場から、本稿では、『好色一代女』全体を「老い」という視点で捉え直してみたい。

二　「うき世のしやれもの」一代女

巻一の一「老女のかくれ家」前半、冒頭に「色道におぼれ若死の人こそ愚なれ」という記述があり、色道に溺れた若死が否定される。そして、色道におぼれながら、若死にすることなく老齢化した一代女が登場する。ここで注目すべきは、好色庵のたたずまいと彼女の老いた姿とが、洒落気のある魅力的なものとして紹介されていることである。

女松村立萩の枯垣まばらに、笹の編戸に犬のくゞり道のあらけなく、それより奥に自然の岩の洞静に片びさしをおろして軒はしのぶ草すぎにし秋の蔦の葉残れり、東の柳がもとに筧音なしてまかせ水の清げに、爰に住なせるあるじはいかなる

御法師ぞと見しに．思ひの外なる女の臈蘭て三輪組．髪は霜を抓つて眼は入かたの月影かすかに．天色のむかし小袖に八重菊の鹿子紋をちらし．大内菱の中幅帯前にむすびて。今でも此静粧さりとては醜からす．寝間とおもふなげしのうへに瀑板の額掛て好色菴としるせり．いつ焼捨のすがりまでも聞伝へし初音是なるべし．

天下無双の名香「初音」を焚きしめる臈長けた主の風情は、老衰や老醜といった「老い」の否定的な側面以上に、老熟や老巧といった「老い」の肯定的側面を伝えるものになっている。

豊かな老いを迎えた彼女を尋ねる悩める当世男二人が、彼女に身の上の昔語りを要求する。ここでは、経験的精神的に優位なものとしての一代女の「老い」が、好色に関する若者の悩みを解消する役割を果たす。

「うき世のしやれもの／今もまだうつくし」と目録に掲げられているとおり、二人の若者にとって好色庵の老女の姿は、老いてなお、という以上に、老いたればこそという魅力を備えた人物だった。自分が携わっている世界において、さまざまな経験や想いを経た相手であれば、憧憬の念は一層強くなる。ひっそりと好色庵にくらす老女は、色の道に踏み迷う若者二人にとって、単なる訳知りで優美な老婆という以上に、好色の道を知り尽くした先達としての魅力あふれる存在だったのではないだろうか。

このような冒頭部の「老い」の肯定的な描かれ方を念頭に置きつつ、作品全体を見てみよう。作中には老いるということが様々な形で繰り返し描かれていることに気づくが、以下、江本裕氏の分類[15]にならって

1　序章（巻一の一～巻一の三）
2　公娼期（巻一の四～巻二の三）
3　女奉公人時代（巻二の四～巻五の四）
4　私娼期（巻六の一～巻六の三）
5　終章（巻六の四）

の五段階に分けて考察してみたい。

三　序章――年齢的な違和感

巻一の一後半から巻一の三にかけて、つまり一代女が遊女となる以前の話では、実際の年齢よりも早熟であったり老け込んでいたりすることがきっかけとなって様々な事件が起きる。

他人との相性がポイントとなる好色生活の中では、年齢のバランスも重要な要素となってくる。同年齢の人間よりも早い心身の成長、つまり早熟さはより長く豊かな好色生活をもたらす。

そのような意味での早熟さは、『好色一代男』の世之介にも付与されていた。世之介は、「五十四歳まで。たはふれし女三千七百四十二人。少人のもてあそび。七百二十五人」と、生涯を色に捧げたわけだが、七歳の夏の夜、侍女に戯れかけたのをはじめとして、「事つのり日を追つて。仮にも。姿絵の。おかしきをあつめ」「おとなも。はずかしく。女のこゝろを。うごかさせ」という早熟ぶりを見せる（巻一の一「けした所が恋のはじまり」）。

巻一の一後半における一代女の語りはじめは十一歳の夏から十三歳にかけての官女奉公についてである。

十一歳の夏はじめより．わけもなく取乱して人まかせの髪結すがたも気にいらず．つとなしのなけしまだ隠しむすびの浮世髻といふ事も我改ての物好み．御所染の時花しも明暮雛形に心をつくせし以来なり．されば公家がたの御暮しは哥のさま鞠も色にちかく．枕隙なきその事のみ見るに浮れ聞にときめき．おのつと恋を求し情にもとづく折から．あなたこなた

の通はせ文皆あはれにかなしく．後は捨置所もなく物毎いはぬ衛士を頼みてあだなる煙となすに．諸人書込みし所は消ずも吉田の御社に散行ぬ．

十代前半という人生において最も感受性の強い自己形成期に「哥のさま鞠も色にちかく．枕隙なきその事のみ」という公家社会の中で暮らしたことが、感じやすい少女のその後を決定づけた。しかも、「人まかせの髪結すがた」を嫌う自意識の強さ故に、言い寄る数々の美男とではなく、「其身はしたなくて．いやらしき」青侍と恋に陥る。流行を追いかけるだけのファッションではなく、自分に最もふさわしい装いを目指すという姿勢と、外面の美しさに翻弄されるのではなく、「初通よりして文章命も取程」の青侍の手紙によって心を動かされるという在り方は、通じ合うものといえよう。新しい髪型の創出は、自分の顔かたちや髪質、また、好みなどを正しく認識した上でなければ成功しないし、それを、流行させたとなれば、時代の社会状況や美意識などにも敏感でなければならない。恋文を読んで相手への思いを募らせるということも、やはり、文章に対する豊かな感受性と想像力がなければ不可能だろう。それらの成就には決断力、行動力も必要である。

その結果が、一般的な加齢の速度を上回る速さで大人になっていった彼女の精神的肉体的成長である。

恋が破綻して青侍が処刑された後、一代女は、四、五日は「心にこたへ身も捨ん」と思うものの、数日後には「其人のことはさらにわすれ」てしまう。それは「あさましく心の変る」たくましくもしたたかな女心故である。つまり、年端の行かない娘である一代女が、すでに恋の経験豊かな女性のような身の処し方をしているということである。しかし十三歳の彼女がそういったしたたかさを持ち合わせていることに周囲の人々は気づかない。「十三なれば人も見ゆるして．よもやそんな事はとおもはるゝこそおかしけれ」という語りは、自分の肉体的精神的発達段階が一般的な十三歳という年齢と大きくずれていることを認識し、そのことさえも、処世に利用していることを示す。小野小町と深草少将の百夜通いの伝説の俳諧化であるといわれる[16]このエピソードは、「拒む女」としての小町のイメージを「挑む女」という、より積極的なイメージに置き換えたものといえそうである。

同様の早熟で果敢な態度は、続く巻一の二「舞ぎよくの遊興」にも見られる。

我いまだ何心もあるまじきと．二人の中に寝さゝれてたはふれの折からは．心におかしくて我もそんな事は三年前より．よく覚し物をと歯切をしてこらへける．（中略）さても〳〵油断のならぬは都．我国かたのあの自分の娘は．いまだ門にて竹馬に乗あそびしと．大笑ひをいとまにして又親里に追出されける．

西国の武家方の養生屋敷に養女として迎えられた一代女は、当然のように夫婦の間に寝かされる。しかし、すでに心身共に、女として美男である殿に夢中になるほどに成長していた一代女は、当然のように恋を仕掛ける。その結果、都の女は油断できないと大笑いされて暇を出される。西国の人々にとっては、都の小娘の突出した好色性が、彼女の実年齢と強く違和感を持つものだった。

このような数字の上での年齢と実際の心身の状態とのずれが、続く巻一の三「国主の艶妾」では、年若い国主の老化した肉体という形で表現される。それが、一代女の若々しい肉体とのあいだに齟齬を来す。前二話は、年齢的には恋愛の対象外のはずの一代女が、実年齢に対する一般的な理解を超えて恋を仕掛けた話だった。一方、巻一の三は、始めて正式な男女関係が許されたにもか

かわらず、相手が年寄りじみた人間だったという話である。

江戸で正妻を亡くなしたある大名の国女臈を求めて七十余歳の「家ひさしき奥横目」が京へ派遣される。「物見るには目がねを掛・向歯まばら」になり「世に楽しみなき朝夕」を送る奥横目が、突然大役を仰せつかったのは、性欲が衰えていて安心だからである。肉体的な衰えが露わな老人の姿を滑稽な物として笑いの対象にする。これは、後段で、明らかにされる年若くして強壮剤の世話になっている殿の姿と響きあうものである。

さて、多くの京女の中から選ばれ、しかも妾という自分にふさわしい境遇を得た一代女は、「我薄命の身ながら殿様の御情あさからずして、うれしく」と喜ぶが、日に日に腎虚し衰弱していく殿との生活はあっという間に破綻する。年寄りたちは、「都の女のすきなるゆへ」と断じて、一代女を親里に帰してしまう。自己の心身の実体が周囲に理解されないという点は、前二話における子供扱いされたまま早くから好色生活に傾斜した一代女の体験と通じるものである。

彼女の実質的な肉体と精神が、年相応のものとして受け入れられるのは、遊里においてである。

四　公娼期――老いることは堕ちること

巻一の四から巻二の二にかけては公娼期の一代女の様子が描かれる。太夫を頂点とした階級社会で、太夫、天神、鹿恋と段階的に下降していく原因は加齢にある。

巻一の四「淫婦美形」において五十両で身売りを余儀なくされた一代女は、修行するまでもなく遊女について理解しており、「つき出し」として即座に太夫となる。はじめて彼女の年齢と内実とが一致したということになる。

しかし、それもほんの一時のことで、「すかぬ男には身を売ながら身をまかせず。つらくあたりむごくおもはせ」という驕慢さ故に太夫職を追われ、天神に降下してしまう。

続く巻二の一「淫婦中位」には、天神に格下げされた一代女が太夫時代との境遇の隔たりを歎く記述が見られる。「我大夫とよばれし時いやしからぬ先祖を鼻に掛ぬ」「大夫の時は一日も宿にて暮さず」「大夫の時は五七度も心よく逢馴し後もたよりはせざりき」「大夫の人に物やるもおもへば博奕の場にての銭のごとし。ない時の今は耻捨て御無心申申斐なし」等、太夫との落差が繰り返し述べられ、降下ということが強調される。そして、末尾では早くも老いた肉体への嘆きが述べられる。

耳の下に霜ふり月の比。粟粒程なる物いつとなくなやまして。其跡見ぐるしく是又つらきにはやり風にして。我黒髪うすくなりて人なを見捨ければ。うらみて朝夕の鏡も見捨にける

肉体的な美しさが優先される階層社会では、たとえ一歳あるいは一ランクの違いであっても、それは、より若く美しい状態、あるいは、より高い位からみると「老い」であり「降下」である。巻一の四から巻二の二にかけて遊里での降下＝老化が明示される。ここでの老いは、肉体の老化という否定的なものであり、若さと美しさが優先される遊里ならではの価値観ともいえる。

ところが、続く巻二の二「分里数女」では、一つずつ位を落としそのことを嘆きながらも「むかしの気立入替り万事其時の心になる」というしたたかな適応力を示す。

囲女郎となった段階では、「大夫天神迄勤めしうちはさのみ此道迚もうきながらうきとも覚へず。今の身のかなしき事かくもまたむかしに替る物哉」とかつての自分を振り返って現在の境遇を嘆いているが、三匁取、二匁取、一匁取、五分取と身分の降下が

順々に記述され、「その道〳〵に」応じた身の処し方をして、「世のさま〴〵見および」多くの経験を積む。「十三の年明て。頼む島もなき淀の川ぶねに乗て二たび古里にかへる」という記述から、太夫天神と恵まれて過ごした時期より遙かに長い彼女の端女郎生活があったことが理解できる。

作品の早い段階で、遊郭という階層社会が用意され、日々老いていく現実が強調されるという構造になっている。

五　女奉公人時代――さまざまな「老い」

巻二の三「世間寺大黒」で、「小作りなるうまれつきの徳」を利用して、寺小姓に変身した一代女は、そのまま浮世寺の大黒となる。

逼塞したなかでの生臭坊主の過剰な性が皮肉に描かれている。そんな日常に辟易していた一代女ではあるが、「なるればそれも悪からす」と、自分の置かれた状況を受け入れてしまう。

ところが、寺の長老の二十歳年長の隠し妻が彼女の目の前に姿を現し恐ろしくなって寺から脱出する。

ある夕暮に風梢をならしばせを葉乱れ．物すごき竹縁に世の移り替を観じて。独手枕の夢もまだ見ずまぼろしにかしらは黒き筋なく臭に浪をかさね手足火箸のごとく。腰もかなはず這出聞へ兼つる声の哀に。我此寺に年ひさしく住寺の母親ぶんになつて。身もさのみいやしからぬを態と見ぐるしく持なし。長老とは二十年も違へば物事耻しき事ながら。世を渡る種ばかりに人しれず夜の契の浅からず。（中略）うらみの日をつもるはそなたは我をしられぬ事ながら。住寺と枕物語聞時は此年此身になりても此道をやめがたく。そなたに喰付おもひ晴すべき胸定めて今宵のうちといふ

足腰が萎えて歩くことができない老婆と彼女の飽くなき色への執着。年齢に怖じない老人の性欲という問題については、「性の過剰と欠如」という視点から既に指摘されていることであるが、[17]「老い」という視点から考えるならば、性欲と「老い」が結びつくことによって、「老い」の逞しさがクローズアップされる。

以下様々な形で肉体の老化と性欲の問題が取りあげられる。

巻二の四「諸礼女祐筆」では、逆に一代女の挑戦的な性とそれ故に老化した男の身体、巻三の一「町人腰元」では、老奴や強蔵の主相手に一代女の空回りする性欲が描かれる。と同時に話末では、『卒塔婆小町』を下敷きにして美女落魄のイメージが重ねられ、彼女の衰微する身の上が強調される。同様の一代女の落魄のイメージは、巻三の三「調諧哥船」にも見られる。

我もいつとなく．いたづらの数つくして今惜き黒髪を剃て．高津の宮の北にあたり高原といへる町に．軒は笹に蕎て幽なる奥に．此道に身をふれしおりやうをたのみ．勤めてかくも浅ましくなるものかな

しかし、哥比丘尼を勤めた一代女は、「すぎにし時の様子も残れば」と商売し、衰えてなおという逞しさを見せる。「向後身にあまりての色をやめぶんと．おもひ定めしうちにもなをやめがたき此道ぞかし」という言葉は、その場その場の身の処し方で衰える肉体に折り合いをつけていることを物語る。

巻三の四「金紙匕髻結」は、巻一の一でオリジナル髪型を発明し流行させ、前話では「惜き黒髪剃て」比丘尼となった一代女の髪に纏わるエピソードの一つである。一代女は、「我いつとなく人の形振を見ならひ．当世の下島田惣鈎といふ事を結出し」、髪結いとして屋敷奉公に出る。まだ十代の奥方の髪の薄さは、若い年齢に老いた肉体という取り合わせである。奥方は一代女の黒髪

に悠気しそれをばっさりと切らせ、さらに、一代女の生えてくる髪を「額のうすくなる程抜捨よ」と命ずる。一代女の報復によって夫に隠していた薄髪が露見し、離縁。一代女はすかさず夫を「こちの物に」してしまう。

巻四の二「墨絵浮気袖」では、色道を止め女ばかり相手の縫い物師として奉公するが、中間の小便姿に刺激されて年季が明ける前に縫物奉公を止め、「万物ぬひ仕立屋」の張札をして男の出入りを待ち受けることにする。思いついて、奉公先に出入りしていた呉服屋の「年がまへなる」手代に恋をしかける。商売がおろそかになった手代は「若げの至りとも申されず」追放されてしまうが、一代女は懲りずに「あなたこなたの御気を取．一日一歩に定め」針箱片手に色を売り歩く。もはや年齢的には若くはない一代女の色への執着とそれを可能にする彼女の心身の若さが描かれている。心身が年齢以上に成長していた早熟な一代女とは逆に、ここには、心身が年齢以下の若さを保つ老けない一代女がいる。

巻四の三「屋敷琢渋皮」では、「自もよる年にしたがひ身を持下て（中略）いつとなくつやらしき形をうしなひ．我ながら采体いやしくなりぬ」と、自身の老いに直接的に言及する。茶の間女に身を落とし、七十二歳の中間に「君の御事ならばそれがし目が命惜からず」と迫られるが、中間は老いた肉体が思うようにならない。それを一蹴し、「先度逢うた歩行の人より若い男は御ざらぬか」と言い放つ。

自らの肉体に尚自信のある一代女は、続く巻四の四「栄輝願男」において、年寄り男をあしらい一つでたぶらかそうと隠居仕えに出る。ところが、女隠居だったので思惑が外れる。思いがけず同衾を命ぜられ「きのどくなるめ」に遭う。一代女の思惑違いも、女隠居の「一度は又の世の男とうまれてしたい事をと」いう願いも、双方における、思い通りにならない好色生活とその中でさらに老いと向き合わざるを得ない現実とを暗示するものといえる。

六　私娼期――「老い」とのたたかい

私娼期における一代女はもはや避けられない「老い」の現実に直面しながら、あの手この手で「老い」への挑戦を試みる。

巻五の一「石垣の恋くづれ」では都の茶屋女となる。「色はつくれどすぢ骨たつて鳥肌にさはり」という肉体の衰えは隠しようもなく「あの女は賃でもいや」といわれさすがに「身にこたへてかなしく」なる。しかし分知大臣が「ふるき我」に情けを掛けることとなり、彼の通い女となる。分知の大臣は年を重ねた「ふるき我」だからこそ目を掛けたのである。「老い」の効用である。

さらに、巻五の二「小哥の伝受女」では「白粉にくぼたまりを埋み口紅用捨なくぬりくり」と、老いを隠す風呂屋者の風情が描かれ、一層したたかな「老い」がクローズアップされる。一方で一代女は「男女の淫楽は互いに臭骸を懐といへるも．かゝる乱姿の風情なるべし．我も亦其身になりて心の水を濁ぬ」と老いを自覚していく。

巻五の三「美扇恋風」では、目の養生をする女達が銘々の身の上話を展開。一代女も「寄年にしたがひ」「しつけ目を煩」う。「髪はつゐ角ぐり臭に白粉絶て．早川織にそぎ衣裏をかけて．さのみ見ぐるしからぬ目の中の雫を．黄色なる絹の切にてすこしつふき拭たる風情．何とやらおもはくらしきものぞかし」という描写は、老い衰えた自らの様子を語りながらも、目を煩い黄色い絹の布をあてがう風情に趣を見出したものである。老いて衰えた肉体さえも、常とは異なる風情として肯定的に認識している。

そのような一代女に五十余歳になる五条橋筋の大扇屋の亭主が一目ぼれし求婚。「女にはしれぬ仕合のある物にて」と喜ぶ一代女だが、浮気な態度であったため、扇屋を追出される。その後糸繰り女、さらに隠居の二瀬女になる。

立居のままならぬ隠居を哀れみ、せめて隠居が「四十斗年若にして、夜の淋しさをわするゝ事ならばと」思う一代女であったが、逆にその強蔵故に二十日もしないうちに衰弱させられる。衰える「老い」と衰えない「老い」がぶつかり合う話である。衰える「老い」が彼女の側に表現され、いよいよ「老い」の現実が一代女の身に迫っていることが示される。

「身をぞんざいに持なし」始めた一代女は巻六の一「暗女は昼の化物」では暗物女となる。話の冒頭部には落日・枯野・死のイメージが広がる。

秋の彼岸に入日も西の海原、くれなゐの立浪を目の下に上町よりの詠め、花見し藤もうら枯て物の哀れも折ひしの気色、をのづから無常にもとづくかねの声太鼓念仏とて、其暁の雲晴ねども西へ行極楽浄土ありがたくも殊勝さも、入拍子の撥鐘木聞人山をなして立かさなりしに、

「居物宿に行て分の勤めも恥かし」と自らの境遇に対して否定的な一代女であるが、巻六の二「旅泊の人詐」では「我また流れの道有程は立つくして、諸仏にも見かぎられ神風や伊勢の古市中の地蔵といふ所の、遊山宿に身をなして世間は娘といはれて内証は地の御客を勤め」る。しかし、脇顔の小皺をみつけられ、さすがに客がとれなくなる。「不首尾次第にかなし」「年寄女は闇にかづかず」「夕暮に見る形のいやしきとて。隙を出され」る。

このように紛うことなき肉体の「老い」が強調されながらも、巻六の三「夜発の付声」で、なお「老い」に挑戦する一代女が描かれる。「今ははや身に引請し世に有程の勤めつきて、老の浪立恋の海」ということで、新町遊郭で遣手奉公。「以前に引替て恥かし」という一代女であるが、遊女の弱点を知り尽くしてとりしきった為に遊女達に嫌われて玉造に移り住む。さすがに、「惜からぬは命今といふ今浮世にふつ〳〵とあきぬ」と述懐し、六十五歳になるのに小作り故に四十歳余りに見られても喜ばない。「観念の窓」から孕女を見て「いよ〳〵世をかぎり」と思うが、夜が明けると「つらなや命の捨がたくおもはれ」結局隣の七十あまりの老女に勧められて惣嫁となる。どん底まで来てなお、「老い」などものともせずに、たくましく生活費を稼ぐ女達に一度はのせられ惣嫁に挑戦する一代女である。さすがに「ひとりもとふ男なくて、これを浮世の色勤めのおさめ」とする。

以上のように、作品のいたるところで「老い」と性との関わりがさまざまに描かれている。肉体的な衰えという否定的消極的な側面に即して考えれば、色道における「老い」もまた、色香の衰微、精力の減退をもたらすはずのものである。しかし、作品に描かれるのは、そのような「老い」だけではない。外見的な「老い」の姿とは相反する旺盛な精力であったり、「老い」をカバーし、隠し、時には、利用するような処世の在り方が繰り返し描かれる。

彼女はなぜ、これほどまでに飽くことなく、何度も何度も「老い」と色道の間をいったりきたりしたのだろうか。

好色生活の始まりにおいて、自分が普通よりも早く年を取りすぎたために周囲の誤解を受けた一代女は、遊里での生活では、年を取ることが格下げにつながるという現実を強く認識する。年齢を重ねること、すなわち老いていくことに関する問題が常に彼女の周囲にあった。そして、遊里を出てからの彼女の後半生は、肉

体的な若さの喪失と向き合いつつ、次々と色道に関する職業を移っていく過程であったといえる。

江口の遊女が普賢菩薩の化身と見られたように、聖なる仏が俗なるものに姿を変えて現れ、衆生を済度するという発想が古くからある。『七人比丘尼』「左京の御台」には、観音が三十三身の仏に現じる例を引きながら、自分をとりまくものたちが観音の化身であったことを指摘する条がある。[18]

老いたる尼宣ひけるは、是はまさに、観音の三十三身に身を顕して、子となり妻となり、つるとなり、一切の衆生をすくひ給ふらめ、法華経の心をひらき見侍れば、じやけんの父をすくはんため、しやうとくぶにんといふ后となり、じやうざうじやうげんといひし二人の子と成、十八へんを顕し、父のわうをすくひ入て、めでたき仏となし給ふなり、此の心を見侍れば、御身の妻となり子となり、鶴となり給ふも、みな菩薩のけだうのてだてならずや、あらたのもしや、うら山しうこそ侍れ

これは、「自在の神力」を有する観音が、「種種の形を以って、諸の国土に遊び、衆生を度脱う」という観音三十三種の化身の教化[19]に由来するものである。『小町草紙』でも小町を観音の化身と定位する。

そして、一代女の職業遍歴は、三十三に及ぶ。

1・官女仕え（巻一の一）　2・舞子　3・養女（以上巻一の二）　4・大名妾（巻一の三）　5・島原太夫（巻一の四）　6・天神（巻二の一）　7・十五　8・端局（以上巻二の二）　9・寺大黒（巻二の三）　10・女祐筆（巻二の四）　11・呉服屋腰元　12・大名表使（巻三の二）　13・歌比丘尼（巻三の三）　14・武家方髪結女（巻三の四）　15・介添女（巻四の一）　16・お物師役　17・仕立女（以上巻四の二）　18・茶の間女（巻四の三）　19・中居（巻四の四）　20・茶屋女　21・通女（以上、巻五の一）　22・伝授女（巻巻五の二）　23・雑女　24・扇屋妻　25・糸くり女　26・隠居夜伽女（以上巻五の三）　27・蓮葉女（巻五の四）　28・暗物女（巻六の一）　29・旅籠屋の人待女　30・紅、針売る女（以上巻六の二）　31・遣り手　32・惣嫁（以上巻六の三）　33・尼（巻六の四）

西鶴が三十三という数を意識していたとはいえまいが、同一の人間（仏）が次から次へと姿変えていくという有り方は、外面的な姿を仮のものと考える発想という点で通じ合う。それが、ある意味での近世的な女性観といえるかどうかについては後考を要するが、たとえば、同時代の遊女評判記『都風俗鑑』（延宝九年刊）では、女性は、資質とチャンス次第では、最高位の座を獲得することもあると述べられる。[20] しかも、それらに恵まれないときにはそれなりの職を探し、その時々に応じた色里や遊女をすればよいという。

されば女は氏無うて玉の輿なきにしもあらねば、是ひとつの望にて、若き内はかくし歩きて、年長けては、生半の悴世帯は嫌な兆しになり、たゞ剽軽と成り果て、寄る辺定めぬ浮舟と、波に漂ふもかず侍り。或は町の直人に抱えられて、茶屋、又は遊女の出見世に出さるるもあるなり。風呂屋に行て勤めをするもあり、しま〳〵に行もあり。江戸に行き、大坂、長崎に渡るも侍り。さては建仁寺町の比丘尼が方へ売らるゝもあり、とり〳〵、しな〳〵にて侍れば、高き有、下直成有。貴賤、僧俗それ〳〵のもてあそび、御心任せにして、更に手を尽く事侍らねば、品のわかれたるに任せて、銭銀を費やす時、鴛鴦の契り、海老の濡れ、比翼の諸分、連理の以為、ひ

とつも乏しき事なし。

近時、一定の仕事につかないフリーターとなる自由な生活スタイルが若者の間に流行している。若者だけではない。新聞の投書欄には一九六〇年代初めにフリーターとなり百種類近い業種を体験し現在に至る自称「老フリーター」の自由賛歌の文章[21]が掲載されてもいた。次から次へと職業を変化させていくことは、時々刻々と変化していく心身の実態に合致した合理的な処世術ともいえる。つまり、そのような自在性が「老い」を、落ちていく一方の衰退敗北のイメージではなく、したたかで粘り強いものにしているのではないか。

七　終章――「老い」の受容

巻六の四「皆思謂の五百羅漢」では、五百羅漢を前に過去を現前化させ、「惣じて五百の仏を心静に見とめしに。皆〻逢馴し人の姿に思ひ当らぬは独もなし。すぎし年月浮流れの事どもひとつ〳〵おもひめぐら」す一代女の姿が描かれる。一代女は五百羅漢を目の前にしてリアリティをもって自己の人生を圧縮したかたちで振り返ったときに、「長生の耻」という思いに襲われて昏倒する。法師にやさしくされて「殊更に耻かはし。それに言葉もかへさず足はやに門外に出」ていく。入水を図るがよしみある人に声をかけられて思いとどまり、隠棲の身となる。その後七年が経過して悩める若者二人の訪問を受け、身の上語りを促されたということになる。

好色庵にいたるまで三十三に及ぶ職業を転々とし、果敢に老いに挑戦し続けた一代女であったが、その半生に対して、大雲寺では「長生きの耻」と悔悟し、若者二人に向かっては「気を濁して、おもふまゝ身を持くすしてすむもよしなし」と自己卑下的に語っていた。しかし、語り終えた時には澄み切った自己肯定的な境地に達している。

よし〳〵是も懺悔に身の曇晴て。心の月の清く春の夜の慰み人。我は一代女なれば何をか隠して益なしと。胸の蓮華ひらけてしぼむまでの身の事。たとへ流れを立てたればとて心は濁りぬべきや

彼女はもはや「老い」と戦う必要などない。序章において客観的には魅力的な老婆として存在していた彼女が、ここで初めて主観的に自らの「老い」を受容することができた。

「老い」と向き合い、戦い、最終的に「老い」を受容した一代女――このような『好色一代女』の到達点を、『好色一代男』『諸艶大鑑』の最終場面と比較してみたい。

『好色一代男』巻八の五「床の責道具」では、放蕩の限りを尽くした挙げ句に、還暦を迎える世之介が、「ほどふりて足弱車の音も耳にうとく。桑の木の杖なくてはたよりなく。次第に笑しうなる物かな」と「老い」を自覚し、また、「おれ計にもあらず。見及びし女の。かしらに霜を戴き、額にはせはしき浪のうちよせ。心腹の立ぬ日もなし」となじみの女郎達の老いをも敬遠し、女護島渡りを計画し実行する。

それより世之介は、ひとつこゝろの友を、七人誘引あはせ、難波江の小島にて、新しき舟つくらせて、好色丸と名を記し、緋縮緬の吹貫、是はむかしの太夫、吉野が名残の脚布也、縵幕は過にし女郎より、念記の着物をぬい継せて、懸ならべ、床敷のうちには、太夫品定のこしばり（中略）生舟に鯵をはなち、牛房、薯蕷、卵を、いけさせ、櫓床の下には、地黄丸五十壺、女喜丹弐十箱りんの玉三百五十、阿蘭陀糸七千すぢ、生海鼠輪六百懸、水牛の姿二千五百、錫の姿三千五百、革の

姿八百・枕絵弐百・伊勢物がたり弐百部・（中略）これぞ二度・都へ帰るべくもしれがたし・いざ途首の酒よと申せば・六人の者おどろき・爰へもどらぬとは・何国へ・御供申上る事ぞといふ・されば浮世の・遊君・白拍子・戯女・見のこせし事もなし・我をはじめて此男共・こゝろに懸る・山もなければ・是より女護の島にわたりて・抓どりの女を見せんといへば・

強壮剤や閨房用具、遊女との思い出の品々を満載し、吉野の脚布を棚引かせる祝祭的な好色丸の船出は、既に指摘されているように補陀落渡海をイメージさせる葬送の形[22]である。

ここでは、色道の粋人世之介にとってそぐわないこととして、肉体と金銭に拘束された限定的な現世の遊里から、海の彼方の女護島での永遠の饗宴へというかたちで、「老い」が巧みに回避されている。

また、『諸艶大鑑』の場合は、冒頭において、父世之介が女護島へ渡ったことに関して、世伝は「なんぞやあぶなき海上を越。無景の女島にわたり給へり」と懐疑的な見解を述べる。しかし、最終章「大往生は女色の台」において、やはり、一気に現世の遊里から来世の遊里へと転じていく。「四十より内に留る事をさとらずば」と、「三十三の三月十五日切に。さし引なしに遣ひ捨。大臣大往生を極め」るために、遊里からの撤退を決意する。

世伝に不思義の夢のつげ。何国と定めず思ひ出。願ひの道に。入野の薄萌出。荻の焼原に火を掛。一代のやりくりの文つみかさね。煙の中に手をあはせ。眠れるやうにりんじうの時。天半五色の雲引はへ。一歩小判の花降は。日比蒔置し種ぞかし。世を先だちし太夫ども。年月の御恩此度と。諸〳〵の菩薩に姿を替。八葉の小蒲団にすくひ取給ひ。玉琴に須賀垣をのせ。三筋になげぐし。こがね盃銀の間鍋。七宝の菓子盆。青磁の名香。かさしの枝。いづれも身より光をはなち。彼岸に引舟の女良迄も。爰にあらはれ。女太鞁の藤も御機嫌とり。石車の伊右衛門がけいはく。井筒屋の太郎兵衛勝手にひかへ。玉の箱階あがれば。世界の傾国一目に。四方明の大二階。吉野が居姿。和泉が奴風俗。あづまがしとやか面影。三夕が物ごし。小太夫が花車かたぎ。夕霧が情貞。半太夫がうつくしさ。和州がばつとしたもよし。長門が物いはぬも位あり。大橋が自然とゆたかなる風情。其外太夫を揃て。一座に見る事。前の世ではならぬ事なり。

夢告に始まった『諸艶大鑑』が夢告に終わる。どこまでが夢でどこまでが現実かわからないような夢幻的な記述は、聖衆来迎図を思わせる女郎降臨[23]の中での至福感に満たされた極楽往生を伝える。「前の世ではならぬ」傾城を一度に見る上首尾がかなったという末尾は、世伝の死を敗北感悲壮感とは無縁なものにしている。つまり、ここでも「老い」は色道にあるまじき問題として巧みに捨象される。

世之介の水平的な往生に対し、垂直的な往生という違いはあるが、現世の遊里ではなくこの世ならぬ女護島や雲上での永遠の性の獲得によって閉じているという点で、『好色一代男』と『諸艶大鑑』は同じ終わり方である。早くから「老い」の問題を抱え込み、「老い」と獲得しながら生き、老いたればこそ「われは一代女」という境地に達した好色庵の一代女とは対照的である。「老い」を回避した世之介と世伝に対して、「老い」のあらゆる状況に直面させられた一代女。「老い」を美しさの喪失として捉える『好色一代男』と『諸艶大鑑』の図式が『好色一代女』では逆り替えられているといえよう。

西鶴の「老い」に対する考えは、後年の『浮世栄花一代男』や『好色盛衰記』、『西鶴置土産』などからも読みとって行くべき問題である。今後の課題としたい。

注

＊西鶴作品の引用はすべて定本西鶴全集（中央公論社）所収の本文に拠る。

（1）「『好色一代女』と小町伝説」（『弘学大語文』第11号、一九八五・三）参照。

（2）「『好色一代女』と『小町物がたり』、『小町草紙』」（『都大論究』第3号、一九八六・三）参照。

（3）「『好色一代女』試論（下）―そのしたたかな生と性―」（『文学』一九八五・一〇）

（4）「『好色一代女』の構造」（『国語国文』一九八五・一）参照。

（5）「『好色一代女』私見」『静岡女子短期大学紀要』第9号、一九六三・三）参照。

（6）「『好色一代女』の構造―増殖する話―」（神保五彌編『江戸文学研究』一九九三・一、新典社）参照。

（7）「〝一代女〟の形象性をめぐって―受容者側からの読みを中心として―」（『日本文芸研究』第40巻第3号、一九八八・三）参照。

（8）「『好色五人女』と『好色一代女』」（講座元禄の文学第二巻「元禄文学の開花Ⅰ」―西鶴と元禄の小説―、一九九二・六、勉成出版）参照。なお、高橋俊夫氏は、「『好色一代女』首章瑣語」（『文学研究』42号、一九七五・一一）において、老いた一代女を艶隠者のイメージで肯定的に捉えており示唆的である。

（9）引用は新日本文学大系　西野春雄校注『謡曲百番』（一九九八・三、岩波書店）所収の本文に拠る。

（10）同右。

（11）片桐洋一『小野の小町追跡』一九七五・四、笠間書院）。

（12）引用は新日本古典文学大系梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』下（一九九三・一〇、岩波書店）所収の本文に拠る。

（13）前掲注（11）に同じ。

（14）「老いの表現史」（宮田登・新谷尚紀編『往生考日本人の生・老・死』二〇〇〇・五、小学館）参照。

（15）「『好色一代女』の一設定」『西鶴研究序説』（一九八一・九、新典社）参照。

（16）前掲注（1）に同じ。

（17）長尾三知生「『好色一代女』における語りの定式」（『近世文芸研究と評論』第25号、一九八三・十一）参照。

（18）引用は『近世文芸叢書』小説第三（一九一〇・九、国書刊行会）所収の本文による。

（19）坂本幸男・岩本裕訳注『法華経』下（一九六七・十二、岩波書店）

（20）「女を仕立てる手入并奉公の品」（渡辺守邦・渡辺憲治校注新日本文学大系『都風俗鑑』一九九一・二、岩波書店）

（21）「わが道を今も老フリーター」（『朝日新聞』二〇〇〇・八・二七付「声」欄）

（22）中島隆「『好色一代男』終章の「俳諧」」（『初期浮世草子の展開』一九九六・五、若草書房）参照。

（23）江本裕「西鶴小説の挿絵―『諸艶大鏡』の首尾二章を中心に」（『芸能文化史』第11号、一九九一・九）参照。